《補足説明》

◎発表者　生垣千尋先生（海部高等学校　教諭）

タイトルには「論理的思考」とありますが、今回は、句やインタビューを取り上げており、具体的根拠は何か、というところくらいで、論理的思考というところまではまだ少ししか踏み込めていないように思います。今後、評論や小説を読む中で論理的思考を養いつつ、伝え合う力へと導いていけるよう、継続して指導していきたいと考えています。評価の仕方についても本校国語科の課題です。生徒の活動の評価をどのようにしていけばいいのか。自己評価、相互評価、教員評価、ルーブリック等ありますが、どのように生徒への評価として取り組んでいけばいいのか。他校の実践例があればぜひ聞かせていただきたいと思います。

《質疑応答》

◎大窪俊之先生（阿波高等学校　教諭）

今の学校教育、学習指導の価値観では、生徒の側から起こってくる思いや考えをどこまでも拾ってやるということは難しい状況だと思います。そんな中、先生の一つの授業の展開は何かアジールのような意味合いをもつのではないかと感じました。授業では、たくさんしなければならないことがあり、時間的余裕がありません。先ほども「聞けない」という話がありましたが、英語の技能なんかもそうですが、四つの技能を分けてしまう感覚があります。しかし、実はそれぞれの技能は相互関係的なものであって、特化して指導することがあっても、本来は他の技能と補い合いながら相互的、複層的に指導していくべきところだと思います。しかし、今の学習指導のあり方では、ともすればそれを分断してしまう。そういう要素があるように思います。

そこで質問ですが、生徒に時間的な余裕がない中で、どうやって今のアジールのようなものが維持されるのかということです。子供を取り巻く社会環境、例えば地域共同体や家庭がほとんど崩壊しているような中で、誰とも会話しない、インターネットやＳＮＳのありようが、話すときは話す、読むときは読む、聞きたいときは聞きたいことだけ聞くといった状況です。そういう分断の中では言語活動が一人のつぶやきで終わってしまい、コミュニケーションになりません。一方、社会に出たり、大学生になったりすると、社会のニーズに合わせた立ち振る舞いを求められます。例えば電話の応対なども、企業に勤め出すと、模倣する形で自然とできるようになり、世の中もなんとなくそれで通用する感覚があります。そんな世の中で、子供が大人になるのをせっつくようなこの感覚と、生徒を待ってやって生徒の内面を豊かにして

いこうというのを、どのように共存させ、授業を展開していくのかについてお聞きしたいと思います。

◎生垣千尋先生

個人の考えとしては、高校はやらなければならないことが多くあって、制約が多いと感じています。文法も敬語もしなくてはならないし、目の前の生徒の力になっているのかと不安にもなります。しかし、生徒を待って、持っていない力をつける、内面性を豊かにする最後の機会が高校ではないかと私個人は考えています。進学する生徒にはまだ学ぶ機会があります。しかし、就職して社会に出る生徒にとっては、自分自身について考える大切な機会、友人たちとの関係の中で学び、自分の力を知ることができる最後のチャンスだと思っています。

今回の発表は、ほとんどの生徒が就職する情報ビジネス科での実践です。学年に一クラスなので、隣のクラスとの進度調整といった時間的な制約をそこまで気にせずに、生徒と向き合うことをさせてもらえる恵まれた環境です。また、一クラス十五人という少人数の良さを生かし、生徒の足りないところを補い合うこともできます。「情報とコミュニケーション」の授業も同じで、学校設定科目として放課後補習の時間帯を使っており、最終ここまでいかなければならないというものではなく、ＴＴの先生と相談しながら、生徒の状況に合わせて柔軟に弾力的に計画ができるありがたい環境です。

一方、普通科や数理科学科では横並びの授業で展開しており、定期考査に合わせてここまでという設定があり、時間的余裕もありません。そのクラスで生徒を待つ、というのはできていない状況だと思います。しかし、やはり必要なことではないかと感じているので、普通科だから、数理科学科だからできない、ではなくて、他の先生方と連携し、計画を立てて機会を作り、今回のような取り組みをしていきたいと考えています。

◎稲垣かおり先生（鳴門渦潮高等学校　教諭）

私も、インタビューや他者紹介については実践しておりますが、インタビュー項目の回答を発表するだけの他者紹介になりがちな生徒がいます。インタビューの回答を、他者紹介の原稿に書くときに、インタビューの要である「話をつなげていくこと」や「意見を求めたり、聞きたいことを誘導して深みのあるものにすること」はとても難しいことだと思います。生徒に指導される時にどのような働きかけやアドバイスをされているのか、お聞かせいただければと思います。

◎生垣千尋先生

他者紹介のインタビューで、どのように話をつなげて

いくのか、それを生徒たちはとても難しいことだと感じていました。そもそも雑談が苦手な生徒たちです。知っている人とは趣味のことなどでいつまでも話をすることができます。しかし、関わりの少ない人とはあいさつを交わしても、その後沈黙になってしまうという生徒もいます。どのように話をつなげていくのか、というところですが、メインの質問を考えさせて、その回答の中からまた気になることを探し、新たな問いを探すことを繰り返すよう指導しています。また、ＴＴでの授業なので、教員同士で雑談やインタビューの様子を実践してみせたり、関わりの少ない生徒同士でペアを組ませ、話から話をつなげるという雑談の練習をさせたりもしています。まずは、雑談から話をつなげる、ということを意識させています。

《指導助言》　　中村ゆかり先生（阿波高等学校　教頭）

本日の御発表の二つのお取組で素晴らしいことは、まず、「生徒に身につけさせたい力」を検討する材料として、アンケートをしっかりと取り入れられたことです。初めに、「国語が好きである」生徒に対し、「国語が得意である」生徒の割合が低いことが示されましたが、「苦手なこと」と「身につけたい力」が一致しているので、苦手意識を克服すれば、国語を得意教科と捉え、より意欲を持って取り組む可能性が増します。また何が「身につけさせたい力」かを明確にすれば、それを目標として、授業を始め学習活動全体を見通し、計画を立てることができます。発表校では先生方が生徒自身の意識も考慮に入れて、それを検討し明確にし、共通理解をもって教科指導に当たっておられることを、頼もしく思います。

そして、我々教員が明確な方針を持って指導に当たれば、「何ができるようになるか、この一時間の授業や一連の数時間の学習の中で、どのような内容をゴールとするのか」を、生徒に示すことができ、それが生徒の学習意欲を高めることにもなるのではないでしょうか。

また、実践の反省、例えば「適当な言葉が浮かばない。緊張した。」といった振り返りを通して、生徒達が、自分に今後必要な課題を見つけている点が、素晴らしいです。普通科の他者紹介や、情報ビジネス科の句会も同様です。先生方が捉えておられる、個々の生徒の課題や、クラス集団、学年集団の改善すべき点は、生徒自身が認識できたものとは異なっていたり、程度の違いがあったりするかもしれませんが、それまでの生徒が、苦手意識も漠然としていたり、自己ときちんと向き合っていない学習状態だったりであれば、自分自身で課題に気づけたこと自体が大きなステップを踏み出したことを意味しており、さらに次の段階へ進む手がかりになると言えます。

そして三つ目は、表現することへの前向きな取組が、生徒に見られるようになったことです。「話す内容があれば」「発表する内容が決まっていれば」表現活動に伴う緊張が緩和するというのは、話す中身の充実や表現方法の固定によって、ハードルを超えられるということでしょう。ただ、いくつものハードル、課題をクリアしてゴールに到着するには、単位数の少ない科目の実施時数中ではなかなかできないことです。目標に至るまでの段階を考えて設定する必要があります。

一方、グループ学習への前向きな感想の中に、「一人で考えるよりも意見が出てきて、どんどん文が作れる気がした」とありました。グループで、他者の意見を取り入れまとめていく過程は非常に有効で、意見を出し合う喜びもしっかりと味わって、自分を表現してほしいと思います。ただ、それに先立ち、まずは自分が選んだ一句を一人で鑑賞し、自分自身の考えや感想をしっかりと持ち、文にまとめることから始めるという意識を忘れないでほしいと思います。たとえ難しい、苦手だと思っても、

これが、主体的に学ぶ姿勢や、確実に身に付く知識・技能につながると思えます。まず個人の時間をきちんと取り、グループへ、そして再び自己の深まりのための個の活動へ戻していくと効果的ではないでしょうか。

ところで、新学習指導要領教科国語の目標の中には、「言葉による見方・考え方を働かせ」とありますが、これは、生徒が学習の中で、対象と言葉や、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられています。御発表の句会の中でも、「おもう」という語に当てる漢字の違いで、作者の「友達へのおもい」が、本人の意図したものとは違う「恋人へのおもい」と鑑賞者に受け止められていました。ここで作者は、自分自身の言葉の選び方を振り返った、つまり言葉に対して自覚したと思います。また、今回は「楽しい、さみしい」等の心情を直接表す言葉は使わないというルールがあり、その上で鑑賞文を書くにあたって、根拠となる言葉をおさえるという指示を出されています。語彙や知識の範疇で約束事を持つ言葉であれば、句をよむ側も味わう側も描かれる風景や世界を共有して持つことができるでしょう。御発表の中で、根拠自体が揺らいでいたというお言葉がありましたが、確かに、優れた俳人の句でこの学習をすると狙いどおりになるでしょう。けれども、だからといって今回の学習効果が低いわけではないと思えます。約束事に縛られない語に、作者は自分の心情を託し、鑑賞者はその語を手掛かり、根拠として解釈しました。それに今回は、伝える方向ベクトルが、いくつもありました。作者が、解説文を作る。鑑賞者は自分の思い考えたことを文にし、グループのメンバーに伝え、相互の鑑賞内容を話し合うことで、伝え合いが広がる。さらに、作者は鑑賞文を受け取ることで、相手を理解することができました。また、おもしろいのは、思いがけぬ自分との出会いです。枯葉道の句のように、自分の意識下にあったものが、句を詠むことで言葉の中に浮き上がっている。他者による鑑賞文によって、そのことに気づく。つまり、作った句に、返しが来たこと。作者にとっても、味わった鑑賞者にとっても、言葉を通じてより深まっていくやりとりの様子です。こうしたおもしろさを発見できたことも、より積極的に国語に取り組もう、自分の思いを表現しようと考えるきっかけとなったと思います。そして何より、言葉に対する自覚、意識が強まったのではないかと思います。

さて、新学習指導要領教科国語の目標の具体的な三項目のうちの第二項目には「生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。」とあります。「伝え合う力」とは、「互いの立場や考え方を尊重し、言語を通して的確に理解したり効果的に表現したりして、円滑に相互伝達、相互理解を進めていく力」のことです。つまり、自分の意図することがきちんと伝わり、相手がどのように感じ、理解

し、それが相手以外の他者や自分にどのように返されていくかを理解する。そしてそれを、社会全般のあらゆる場面で発揮していくことができる。そういう力を生徒につけさせていくということです。今後さらにこの力を伸ばすことが私たち国語科の教員の使命ですが、表現を主とする授業は、生徒の活動に対する予測、想定の準備等もあり、準備から評価まで多くの時間と労力を要します。そして、評価も私たち自身の課題です。よく使われる「きちんと聞く」「わかりやすい発表」といった項目等をどのように評価するか。評価の基準や方法等をどうするか。例えばルーブリックや、先日の教育課程研究集会の講演にありました「パフォーマンス評価」等も今後取り組んでみたいと思う事柄です。

発表校では、今後の課題としまして、個別活動での言語活動の充実や、明確な評価基準の設定、継続指導などを挙げておられました。ぜひ、学校のホームページを御活用になるなどして、今後の御実践を拝見できたらと思っております。

本日御発表いただいた二校のお取組は、私たち国語科教員に多くの学び、視点を与えてくださいました。御発表、本当にありがとうございました。